

レト・ロマンス諸語における「条件法」の形成と用法
—特にスイス・ロマンシュ語スルセルヴァ方言の条件法第II形について—

Formation et emploi du «conditionnel» dans les langues rhéto-romanes
- Avec une mention spéciale sur le deuxième type du conditionnel du romanche sursilvain -

富盛 伸夫

Nobuo TOMIMORI

小論では、レト・ロマンス系の言語、特にスイス・ロマンシュ語における「条件法」形成と用法に関わる問題について取り上げ、なかでもライン河源流地方のスルセルヴァ方言スルシルヴァン語(romantsch sursilvan)で近代以降に発達した接続法と条件法の用法について若干の考察を加えるものである。

はじめに以下の論考の前提として、「レト・ロマンス」という概念について本質的な問題があることをはじめに確認しておきたい。つまり、レト・ロマンス語と一括して呼ばれる、スイス・ロマンシュ語、北イタリアのドロミテ・ラディン語、そして北東イタリアのフリウリ語という3つの言語群に内的統一性の可能性を認めるかどうか、という100年来の伝統的問いかけがある。これについては今回のテーマの中心からはずれるため、直接問題にはしないで一応それを保留しつつ「レト・ロマンス」という概念を用いることにする。

1 レト・ロマンス諸語における接続法の形態

はじめに通時的観点から、レト・ロマンス諸語の条件法形成の形式面を決定した接続法の形態の多様性について整理しておきたい。

まず、ラテン語接続法の時制形とレト・ロマンス諸語の該当する時制形とを対照すると、「現在 > 現在」、「過去完了 > 半過去」のように移行したことがわかる。

1.1 「現在形」については、スイス・ロマンシュ語は全活用型に共通した形に統合されている。

- a) スルセルヴァ方言スルシルヴァン語(romantsch sursilvan): -IAM > -i
第I群から第IV群の代表的動詞を例にとると、以下のとおりである。⁽¹⁾

Type I: canti, canties, canti, canteien, canteies, cantien 「歌う」;
Type II: temi, temies, temi, temeien, temeies, temien 「恐れる」;
Type III: vendi, vendies, vendi, vendeien, vendeies, vendien 「売る」;
Type IV: senti, senties, senti, senteien, senteies, sentien 「感じる」

Marchetti(1952)⁽²⁾によれば、フリウリ語についても接続法現在時制の人称活用語尾が、-i, -is, -e, in, ais, in (第I群動詞の例)と変化するので、基本的にはこのタイプに属しており、これはAISで確認できるようにイタリアでは北と南の方言に多くみられる形である。⁽³⁾

b) 上のタイプに対して、スイス・エンガディン溪谷地方のロマンシュ語では以下のようにラテン語母音Aを留める形を示す。⁽⁴⁾

エンガディン方言 (rumantsch engiadinais) : -AM > -a

Type I: chanta, chantast, chanta, chantans, chantas, chantan 「歌う」;

Type II: gioda, giodast, gioda, giodans, giodas, giodan 「遊ぶ」;

Type III: venda, vendast, venda, vendans, vendas, vendan 「売る」;

Type IV: senta, sentast, senta, sentans, sentas, sentan 「感じる」

c) 他方、北イタリア・ドロミテ地方のレト・ロマンス語では、第I、第II、第III群に共通した活用形となったことが特徴的である。さらに、例えばドロミテ・ラディン語バディア溪谷の方言バディオット語では、ラテン語母音が弱化して-AM > -e(s)となった。⁽⁵⁾

ドロミテ地方バディア溪谷方言バディオット語(badiot): -AM > -e

Type I: iö ames, tö ames, el ames, nos amunse, os amëise, ei ames 「愛する」

Type II: iö veis, tö veis, el veis, nos varunse, os varëise, ei veis 「見る」

Type III: iö vënes, tö vënes, el vënes, nos venunse, os venëise, ei vënes 「来る」

Type IV: iö aldes, tö aldes, el aldes, nos aldiunse, os aldiëise, ei aldes 「聞く」

1.2 条件法の発生と深い関係のある、問題の接続法「半過去形」に関しては、形態上の変化がさらに複雑である。

a) はじめに、俗ラテン語により近い原ロマンス形-ESS-をとどめたのは、ドロミテ語のほかは、スイスではエンガディン方言のみとなっている。ただし、動詞活用型によって若干の異形があることに注意せねばならない。

engiadinais = badiot

Type I, II, III: -ess-

eng.: amess, amessast, amess, amessans, amessas, amessan; etc.

badiot: amess, amesses, amess, amessun, amesses, amess; etc.

Type IV: -iss-

eng.: sentiss, sentissast, sentiss, sentissans, sentissas, sentissan

badiot: sentiss, sentisses, sentiss, sentissun, sentisses, sentiss

b) ところが、スイス・ロマンシュ語の中でもライン河源地帯のスルシルヴァン語では第I群活用動詞のみが母音Aを留めている。そして、言語史的に重要な事実として、この言語では他の方言と異なり、この接続法半過去形から条件法の第一のタイプ(条件法第I形)が生まれたのである。

sursilvan: 接続法半過去形>条件法第I形 (直接形)

Type I: -ass-

cantass, cantasses, cantass, cantassen, cantasses, cantassen

Type II, III, IV: -ess-

temess, temesses, temess, temessen, temesses, temessen; etc.

2 レト・ロマンス諸語の条件法の形成

2.1 レト・ロマンス諸語における条件法の形成を要約すると、以下のような3つのケースにまとめられる。

1) 不定法形に助動詞の要素を付加するタイプ (フリウリ語)

迂言法的形成がなされた点では、多くのロマンス諸語と平行したケースといえるが、フリウリ語の場合は、付加的助動詞がラテン語ESSEの接続法未完了形に由来している。

例) 条件法現在形	接続法半過去形
'o laudarés 「私は称賛するであろう」 (< LAUDARE ESSEM)	: s'ò laudàs
tu laudaréssis 「君は称賛するであろう」 (< LAUDARE ESSES)	: se tu laudàssis, etc.

このようにフリウリ語では、接続法とは別個の叙法として条件法が成立すると共に、*Ottativo* (希求法) も存在するので、ほかのレト・ロマンス語系言語とは全く動詞の法体系が異なるといえる。小論の主題である「条件法」についてもフリウリ語の特異性は明らかであるが、以下ではスイスのロマンシュ語方言を中心に考察を進めてゆくためフリウリ語は特に議論の対象にはしないことにしたい。

2) 接続法半過去形で「条件法」的な機能を含めて表現するタイプ (ドロミテ・ラディン語、スイス・ロマンシュ語で下の第3のタイプ以外の言語)

これらの言語では、共通ロマンス的迂言形 CANTARE + HABEBAT のタイプは形成されずに、接続法半過去形で文脈上要求される条件法的意味を表す。

3) 接続法半過去形に由来する形が「条件法」として独立したタイプ (スイス・ロマンシュ語の中でもスルシルヴァン語、ストツシルヴァン語)

スイス・グラウビュンデン州の中央から西にかけてのライン河源流地方の方言であるスルシルヴァン語とストツシルヴァン語については、接続法 (*conjunctiv*) から「条件法」 (*cundiziunal*) を独立させる方向に進み、上記の共通レト・ロマンス的な枠組みを全く変えて法に関しては独自の道をたどった。まず、近代に入ってから、別に新たな接続法半過去が形成されることとなった。さらに興味深いことは、ほぼ同時期に、第一の条件法とは別にもうひとつの条件法が生まれ、これらふたつの共存する同じ「条件法」の形態間に、何らかの用法上・機能上の分担があるように思えることである。

2.2 前節第3のケースに該当するスルシルヴァン語の条件法形成に関し、まず基本的な事項から確認しておきたい。

(i) 接続法半過去形はいわゆる「条件法」の用法に移行し、条件法として確立した。この条件法第I形（直接形）の形態は、上記の表を参照されたい。ここで「条件法として確立した」という意味は、形態的には他のレト・ロマンス諸語の接続法半過去形とほぼ同じ形態を持ちながら、その機能は「条件法」に限定されたということである。また、スルシルヴァン語は *vegnir a* という迂言的表現を用いて未来形を形成する言語なので、条件法にも *vegnir* を活用させた「条件法未来形、条件法前未来形」が生まれたことが、条件法の体系全体に関わることとして注目に値する。

(ii) これに加えて、元の接続法半過去形に由来する条件法形から、新たにもうひとつの形態が生まれ、上の状況を複雑化させることとなった。初出は1665年の文献で、*permassien* (3人称複数形)が確認されている。⁶⁾

この条件法第II形と呼ぶべき形態は、本来接続法半過去であった条件法の活用語尾に、さらに *-i* を中接して構成する。この接辞 *-i* は、人称変化の形からみて、接続法の形態素に由来する標識であるようである。すなわち、

条件法第II形（間接形：従文中の条件法）：条件法形 *-ass-/-ess- + i*
cantassi, cantassies, cantassi, cantassien, cantassies, cantassien;
temessi, etc.; vendessi, etc.; sentessi, etc.

ここで注意すべきは、強勢アクセントが1人称と2人称の複数で、条件法現在形のように人称活用語尾の上ではなく、条件法の標識となっている *-ss-* の直前の母音に置かれることである。

(iii) 接続法には現在形 *-i* と過去形（複合形 *hagi/seigi + p.p.*）とが元来の基本時制形としてあったが、これに加えて A. Decurtins (1958) によれば17~18世紀頃に新しい接続法の半過去形が発生した。⁷⁾ その形成には、まず接続法現在形の標識である *-i-* の添加がなされ、語幹とこの標識との間に、過去時制の形態素 *-av-/-ev-* が入る。強勢アクセントは、やはり *-v-* の直前の半過去の標識のうえに置かれることとなった。

新たな接続法半過去形（過去の自由間接話法）：直説法半過去形 *-av-/-ev- + i*
cantavi, cantavies, cantavi, cantavien, cantavies, cantavien;
temevi, temevies, temevi, temevien, temevies, temevien; vendevi, etc.; sentevi, etc.

以上に述べたレト・ロマンス語の通時形態論的な特徴を要約すると次のように言えるであろう。

- 1) フリウリ語を除いて、汎ロマンス語的な CANTARE+HABEBAM 型の分析的条件法は発達しなかった。これは、未来形にスルシルヴァン語では他のレト・ロマンス諸語とちがって CANTARE+HABEO 型が形成されていないのと平行関係にある。
- 2) 第2のグループでは、接続法半過去形という形態で条件法の用法を含めた機能を持っていた。
- 3) 第3のグループでは、接続法と条件法が分化し、新たに条件法と接続法にそれぞれ別の形式が

生まれた。

3 スルシルヴァン語の条件法・接続法の形態・機能面の多様性

上述の基本的な枠組みを確認した後で、以下では特にスルシルヴァン語の条件法・接続法の形態・機能面の多様性ないしは二重性について焦点をあててゆく。

検討資料として実例を求めたのは、他の方言と対照ができるという利点からスルシルヴァン語の現代語訳聖書の4つの福音書の様部分、サンテグジュペリの『星の王子様』の翻訳である。⁽⁹⁾ しかし、当該形態の出現頻度等はテキストの性格に大きく左右されるので、それを根拠に有意な推測や結論を求めることは控えたい。

3.1 上記の「過去の自由間接話法」において用いられるとされる第3の形式、つまり直説法半過去 -av-/ev- + i が付いた新しい接続法半過去形については、この小さいコーパスのなかでは発見できなかった。

一般にレト・ロマンス諸語では、間接話法の従文中では接続法半過去形が使用される。

- (1) [engiadinais] Maria scriva cha que la **giaja** bain.⁽⁹⁾
「マリアは元気であると (いうことを) 手紙に書いている」

特に、スルシルヴァン語 (sursilvan) では、事実に関わる情報伝達でも、この接続法半過去形が使われる。

- (2) [sursilvan] Il bab ha detg che ils affons **durmevien**.
「子供達が眠っている、と父親が言った」
cf. [独]: Der Vater hat gesagt, dass die Kinder *schlafen/schliefen*.
[engiadinais]: Il bap ho dit ch'ils infaunts durmissan.

この形式の用法については、過去の時制に支配された節の中で接続法が要求される箇所に用いられる語法であるとか、自由間接話法であるとか、文法研究者によって様々に解釈されている。筆者個人には、これを接続法の一用法と言ってよいかという疑問がある。むしろ、話法の叙法としたほうがよいのではないか、と思われるのであるが、今回調べた資料の範囲内では、dir 「言う」が導入する間接話法は1回もなく、すべて直後に直接話法が続いていたので、上に対する反例も見つけられなかった。これは今後の研究課題としておきたい。

3.2 以下では特に二次的な形態と呼べる条件法第II形について検討することにする。この形態の扱いについては、研究者の立場によってちがいがあがる。条件法の第I形を直接形、第II形を間接形と呼ぶのが、スルシルヴァン語文法の伝統となっているが、Liver (1982)⁽¹⁰⁾ は動詞体系の中にもともと条件法を独立させていないので、条件法の第II形とは分類せずに、接続法半過去の第II形として従文中の用法としている。彼女は方言差を捨象してスイス・ロマンシュ語全体に一つの動詞体系をたてているが、その記述は徹底していない。

これに対して、学習参考書的な構成をとっているCandinas (1982)⁽¹¹⁾では、「条件法の接続法」(conjunctiv dil cundizional) という表現を用いて、条件法の枠内に接続法的用法をもっているものだとするが、そのメカニズムは明確にしていない。

また、Spescha (1989)はその記述文法書の中に、伝統的な「直接」条件法、「間接」条件法と分けて記述しており双方の用法を詳しく対照している。⁽¹²⁾ その要約をすると以下のとおりであるが、出現の条件と選択の基準との関連が不明である。

a) 間接話法中で、非現実的な仮定を強く示す条件構文：

(3) El pretenda che ti vessies buca giu quellas difficultads, sche ti fussions staus a casa.

「彼は、もし君が家にいたならば、そのような大変なことには合わなかったであろうに、と言い張っている」

b) vuler, giavuschar, sperar, crer, temer などの従文中、またはsenza che, per che, avon cheなどの節中で、過去時制に支配されているとき：

(4) El spera che vus turneies. / El sperava che vus turnassies.

「彼は、あなたが戻ることを望んでいる／～望んでいた」

c) 接続法現在形の代わりとして、「命令、懇願」などをあらわす文中：

(5) El di che ti duessies era vegnir.

「彼は、君もまた来なければならぬ、と言っている」

3.3 さて小論で採り上げた資料の中では、条件法第I形（「王子」では96例、マタイ伝では42例、合計138例）に対して、条件法第II形は、圧倒的に少数（合計5例）しか使われていなかった。この出現頻度の低さは、用法の機能が極めて限定されていることを予想させるものである。

まず、その実例を見ていくことにしよう。聖書「マタイ伝」では1例が認められた。主文はcrer「信じる」の直説法現在形 creias（ここでは特に否定辞 buca による否定文）のため、従文は接続法現在形となるべきだが、文脈では仮定が明示されていないものの潜在的な「帰結」文となっている。そのためにもまず条件法が用いられることが優先され、それが従属文中であるということから第II形をとっているものと解釈される。

(6) Ni creias ti, che jeu savessi buca rugar miu Bab ed el mettes a disposiziun a mi immediat pli che dudisch legiuns aungheles? (26-53)

「「それとも、わたしが父に願って、天の使いたちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。」」

また、「星の王子様」では4例がみられた。次の例では、主文の動詞 explicar「説明する」は複

合過去時制におかれている。間接話法の内容として平行に並べられている二つの従文のうち、第一の従文中の動詞は接続法に置かれている。これは、間接話法に接続法をとるこの言語の特徴である。第二の従文では、さらに仮定条件として「象の大群を連れてきたとしても～できないだろう」という前提があるので条件法的叙法が支配する環境にある。

- (7) *Jeu haiel explicau ai prenci pignet che las plontunas seigien buca cagliom, mobein plontas scobialas baselgias, e ch'ina entira muntanera elefants vegnessi buc a frida da prender cun ella ina suletta plontuna.* (p.22)

「私は小さな王子に、バオバブが灌木ではなくて、教会堂のように大きな木であることを、そしてまた、象の大群を連れてきたとしても、たった一本のバオバブすら絶やすことはできないだろうということを、説明しました。」

下の例では、主文は半過去時制である。本来接続法を要求する従文中に条件法第II形が用いられているのは、文脈上間接疑問文中の発話態度（たとえばここでは「必然」「当然」など）が明確に示されるためであろう。

- (8) *Jeu savevel buca pli tgei ch'jeu duessi aunc dir ad el.* (p.30)

「私は彼に何を言うべきなのか、もはや分かりませんでした。」

動詞 *vuler che* 「～を欲する」の従文中の用法は次の1例のみしかなかった。主文は半過去時制であるので、上記の条件法第II形の用法の b) に該当する。

- (9) *Ella vuleva buca ch'il prenci pignet vesessi co ella bragi.* (p.36)

「彼女は、自分の泣くのを小さな王子を見ることを、望みませんでした。」

一般に、*senza che* に導かれる副詞節では接続法現在形 *possì* が用いられるところであるが、下に掲げた最後の出現例 (10) では、この節そのものも従文の内部にあるため条件法第II形の *pudessi* となっているようである。なお主文は現在形、*sco sche* に導入される従文は条件法現在形におかれている。

- (10) *Ei para sco sch'el curdass verticalamein sur in precipezi senza ch'jeu pudessi retener el.* (p.86)

「彼は、私が引き止めることができないくらいに、奈落に垂直に落ち込んでいくかのようです。」

因みに同じ聖書と『星の王子様』の翻訳を他のロマンシュ語方言と対照すると、スルミラン語版、エンガディン語版では、すべて接続法半過去になっていることが、このスルシルヴァン語の特異性を際立たせている。

4 スルシルヴァン語条件法第II形の統語的特質

前節でとりあげた条件法第II形の出現した統語的環境について、以下では資料の中で他の叙法の可能性も考察範囲に入れつつ条件法第II形の使用に関わる特質についてまとめておく。

4.1 上の例(10)では *senza che* 「～であることなしに」の節中で条件法第II形が選択されたケースをみたが、必ずしも条件法第II形が唯一の可能性ではなく、接続法の用例の方が多かった。

接続詞句 *senza che* は「マタイ伝」で他に2例使用されており、上の例を加えると合計3例であった。下の2例は、いずれも主文の内容の成立しうる条件の設定、あるいは単なる限定のケースである。この場合には、*senza che* に導入される節内部の動詞 (*sappi*, *beibi*)は条件法第II形ではなく、接続法現在形におかれている。

(11) *E tuttina croda buc in dad els per tiara, senza che vies Bab sappi.* (Mattiu 10-29)

(*sappi* は接続法現在形)

「しかも、あなたがたの父の許しがなければ、その一羽も地に落ちることがない。」

(12) *Miu Bab, sche quei calisch po buc ir sperasvi senza che jeur beibi el, sche daventi tia voluntad!* (Mattiu 26-42) (*beibi* は接続法現在形)

「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように。」

例(12)と同じ聖書の箇所ของエンガティン方言ピュテール語でも、この言語の動詞叙法体系に従って接続法現在形になっていることは当然である。

(13) [*engiadinais*] *Meis Bap, scha quai nun ais pussibel cha quaist chalsch passa via da mai, sainza ch'eu il baiva, schi chi dvainta tia volunta!* (*baiva* はピュテール語の接続法現在形)

ただし、*senza che* 節が主節の動詞の過去時制に支配されている場合には、条件法過去形が用いられる例があった。下の例(14)では、主文は複合過去形(*ha...parturiu*)におかれ、*senza che* 節の中で動詞 *ver* 「持つ」の接続法過去形 *hagi giu* が用いられずに、歴史的には接続法大過去形に由来する形態をとる条件法過去形が使われている。

(14) *E senza ch'el vess giu contact cun ella, ha ella parturiu in fegl.* (Mattiu 1-25)

(*vess giu* は条件法過去形)

「そして、彼が彼女と接することなく、彼女は男の子を生んだ。」

【星の王子様】では、一箇所構文上の変形があるが、ここでも条件法の過去形が使われ条件法第II形ではない。この箇所の文脈からは、話者において発話論上の叙法選択の要求はなく、時制の一致が統語的支配を決定しているようである。

(15) *Aschia sundel jeu staus persuls, senza ina persuna ch'jeu vess propi saviu discuorer...* (p.10)

(*vess saviu* は条件法過去形)

4.2 *sco sche* 「～であるように」の構文は、「星の王子様」のみに15回出現し、その内訳は条件法現在形が14回、条件法過去形が1回、条件法第II形は用いられていない。

(16) *Jeu sundel segliu en pei sco sch'il cametg havess tuccau mei.* (p.11)

(*havess tuccau* は条件法過去形)

「私は稲妻に打たれたように、とびあがりました」

4.3 *crer che* 「～であることを信じる」は、「星の王子様」では7回出現しているが、疑問文でも平叙文でもすべて接続法現在形に置かれている。この動詞の従属節中では直説法も用いられていない。

(17) *Creis ti che quella nuorsa drovi bia pavel?* (p.4)

(疑問文：*drovi* は接続法現在形)

「この羊は、草をいっぱい必要とすると思う？」

(18) *Jeu hiel motivs serius de crer ch'il planet, dal qual il prenci pignet derivava, seigi igl*

Asteroid B 612. (p.7) (平叙文：*seigi* は接続法現在形)

他方、「マタイ伝」では *crer che* は上記の例(6)であげた条件法第II形が1回のみで、接続法現在形の出現回数は0回、この他のケースはなかった。

4.4 *vuler che* 「～であることを欲する」の従文中では、主文が現在時制におかれている時は、従文中は接続法現在形をとっている。*sperar che* 「～であることを望む」の例は出現せず、比較はできなかった。下の例では、条件法を構成する叙法的要請はない。

(19) *Nua vulas che nus prepareien la tscheina da Pastgas per tei?* (Mattiu 26-17)

(*prepareien* は接続法現在形)

「過越の食事をなさるために、わたしたちはどこに用意をしたらよいでしょうか。」

(20) *Mo pertgei vulas ti che las nuorsas maglien las plontettas?* (p.22)

(*maglien* は接続法現在形)

「しかし、どうして羊たちが草を食べる (と言いたい) の？」

4.5 *parar che* 「～であるように見える、思える」の構文は、「星の王子様」のみで、6回出現している。動詞 *parar* に続いて従文を導入する接続詞が *che* のみで *sco sche* でない場合には、主文が過去時制であっても現在時制であっても、接続法現在形が用いられる。

(21) *...ei pareva ch'el audi buca las mias.* (p.4)

(*audi* は接続法現在形)

「彼が私の (言う) ことには全く耳をかさないようにみえた」

(22) *Ei para a mi che las condiziuns seigien favoreivlas...* (p.21)

(*seigien* は接続法現在形)

「私には、条件が好都合だと思える」

接続詞句 *sco sche* により条件法的叙法が優先された場合には、*parar* の従文の接続法的枠は二次的な制約となる。

(22) *Ei pareva a mi sco sch'jeu fuss zun malsegideivels.* (p.30)

(*fuss* は条件法現在形)

「私には、自分が不器用に思っていました」

(23) *Ei vegn a parer sco sch'jeu fuss malsauns...* (p.88)

(*vegn a* は迂言的未来形、*fuss* は条件法現在形)

「ぼくが死んだかのように見えることでしょう」

これらの用例に対して例(10)では二重構造になっていて、*sco sche* に導入されている節では条件法現在形 (*curdass*) であり、さらにその下位に *senza che* で導入されている従文中では条件法第II形 (*pudessi*) に置かれている好例である。

5 まとめ

フリウリ語を除く大多数のレト・ロマンス諸語では、接続法の半過去形、つまり、かつてのラテン語過去完了形に由来する形が、いわゆる「条件法」的な機能を含めて持っている。従って、現在の時制が支配する文脈で接続法半過去形が用いられると、そこでは、直説法の時空的座標空間から全く別の発話論的座標が支配する世界に入るという標識になる。レト・ロマンス諸語の接続法とは、「非・直接話法」という価値・機能を持っていて、そこから一挙に広がる広大な発話者の内的な世界に入る入り口であり、その先どの小宇宙に導かれるかは、発話者の意図の内に隠され、また文法装置に仕組まれている。従って聞き手・読み手は、与えられた発話の場において動詞の活用形態以外の関与的な標識を手掛かりに文を解釈することになる。

レト・ロマンス諸語の中でもスイスのスルシルヴァン語は、接続法半過去形が条件法に機能を移行させた近代になって、その構造的な空き間を埋めるかのように「新たな接続法半過去形」が生まれ、主に「過去の自由間接話法」を表現するのに用いられるようになった。この形式の発生が、接続法現在形と条件法現在形との機能分化に揺らぎをもたらし、過去の叙法的機能と接続法との機能を合わせ持った条件法第II形を生んだのであろう。

この形は、ある種の場面的環境において、ある特定の文型に、そしてある種の動詞に多く偏って使われて、その中でこそ明確な意味を持ってくる。実際、形態はシンタグムの中でしか意味をもちえないと同時に、発話の場的な条件が意味作用を発動させるのである。以下に、条件法第II形の用法についてまとめておきたい。

1) まず原則的には、文法関係の制約が強く働く文、特に従属 (*subordination*) の環境では、統語的に接続法が要求される場合が基本である。上で見たように、特定の動詞・接続詞の支配により、義

務的であることも多い。この場合、直説法と接続法とは相補分布をなすケースがほとんどである。

2) このような接続関係の強い支配下にあっても、話者の明確な発話意図に基づく叙法として、直説法でも接続法でもなく、この条件法第II形が選択されることがある。これは、義務的というレベルではなく、叙法上のオプションである。しかし、主に文法的支配関係に関わる接続法よりも、おそらくは階層上では上位にあつて、選択上の決定順序は、叙法としての条件法が第一位であるように判断される。

3) 話者の発話意味あるいは叙法的に条件法が支配していない従属節の中では、主文の動詞や接続詞句その他の要求する支配関係（時制を含めて）に入ることになる。

以上の考察に従えば、スルシルヴァン語の場合は接続法とは独立させて、「条件法」をたてる必要がある、ということがいえよう。しかし、この名称と実際の機能については、かなりずれがある以上は適当な名称とはいえないことを付け加えておきたい。また、今後さらに多様なレジスターのコーパスを集めて、詳細な検討をすべきであると考えている。

- (1) スイス・ロマンシュ語のスルセルヴァ方言スルシルヴァン語(romontsch sursilvan)の動詞活用については以下の文献を参考にした。
 Candinas, Th., *Romontsch sursilvan*. Cuera, 1982.
 Liver, R., *Manuel pratique de romanche, sursilvan-vallader*. Chur, 1982.
 Spescha, A., *Grammatica sursilvana*. Cuera, 1989.
- (2) フリウリ語については、主に以下の文法書を参考にした。
 Marchetti, G., *Lineamenti di grammatica friulana*. Udine, 1952.
 Matalon, Z.N., *Grammatiche furlane*. Udine, 1977
- (3) Jaberg, K. und Jud, J., *Sprach- und Sachatlas Italiens und der Südschweiz*, Zofingen, 1928 sqq.
- (4) スイス・ロマンシュ語のエンガディン溪谷地方エンガディン方言 (rumantsch engiadinais) に関しては以下の文法書を参照した。
 Ganzoni, G.P., *Grammatica ladina(puter)*. Samedan, 1977.
 Ganzoni, G.P., *Grammatica ladina(vallader)*. Samedan, 1982.
 Velleman, A., *Grammatica ladina d'Engiadin'ota*, II. Zürich, 1924.
- (5) イタリア・ドロミテ地方のバディア溪谷方言バディオット語(badiot)については以下の文法書を参照した。
 Alton, J.B., *L Ladin dla Val Badia*. Brixen, 1968.
- (6) Holtus, G., Metzeltin, M., Schmitt, Ch. *Lexikon der Romanistischen Linguistik, Band III*, Tübingen, 1989. の p.777 による。
- (7) Decurtins, A., *Zur Morphologie der unregelmässigen Verben im Bündnerromanischen*. Bern, 1958.
- (8) 参照した版は次のものである。
La Soncha Scrittüra, Vegl et Nouv Testamaint. Samedan, 1953.
 Saint-Exupéry, A. de, *Il Prenci Pignet*. Versiun romontscha Donat Cadruvi. Mustér, 1975.
- (9) 例文(1), (2), (13)はエンガディン溪谷サメーダン町のピユテール語 (puter) からとったので、発音と綴りに変異形を示している。
- (10) Liver, R., 上掲書 (1982) の pp.69-70.
- (11) Candinas, Th., 上掲書(1982) p.134.
- (12) Spescha, A., 上掲書(1989) の p.615 sqq.